

# 絵巻『富士の人穴』（「常信筆絵詞之巻物」）についてその二

田村 正彦

はじめに

御伽草子「富士の人穴」は、室町時代に成立し、写本や版本、あるいは奈良絵本などとして数々の諸本が現代に伝わっている。そのような中で、本稿では、絵巻形式の「富士の人穴」を、前回に引き続いて紹介する。残念ながら物語の前半部分を収録した一巻（上巻）のみの伝来となっているが、絵巻物としては現存唯一の作例であり、貴重な資料といえるだろう。

さて、本絵巻の構成を示せば、次の通りである。

〔本文01〕〔図01〕〔本文02〕〔図02〕〔本文03〕〔図03〕  
〔本文04〕〔図04〕〔本文05〕〔図05〕〔本文06〕〔図06〕  
〔本文07〕〔図07〕〔本文08〕〔図08〕〔本文09〕〔図09〕  
前回は〔図05〕までを取り上げたので、今回は残りの「本文06」から〔図09〕までを紹介することにする。

## 一、絵巻『富士の人穴』の解説と翻刻（後半）

翻刻に際しては、可能な限り原文通りに記すことを心懸けたが、便宜上、句読点を加えてある。また、漢字は概ね現行の字体に改め、本文の誤りが疑われる箇所には、右傍に（ママ）と記した。「本文」の他に、「口語訳」、「語釈」、「絵」の解説等も付けた。

### 〔本文06〕

かまくら殿、岩屋の奥をみんなことをしよ  
ぞんに思召、国のうちあき所四百町の  
處あり。御判をなして岩やのおくを見  
たらんものに下さるへきとふれ状有  
ければ、皆人申けるは、命ありてこそ  
所領も望みなれとているへきと申者<sup>も</sup>

なし。かゝりける處に、伊豆の国の住人

仁田四郎忠綱と申者、此ことを承り心の

うちに思ふやう、所領千六百町もちたる

なり。今四百町給て松房益若二人の

子ともに千町つゝとらせはやと思ひ、

鎌倉殿に参り、御前にかしこまりて

申けるは、忠綱こそ御はんをなし富士の

ひとあなへいりて見申候はんと申す。かま

くら殿聞召、御悦びはかぎりなし。

### 〔口語訳〕

頼家は岩屋の奥を見たいとお思いになり、国内の空いている土地で四百町の所がある。正式に署名を入れた上で、岩屋の奥を見てきた者にその土地をお与えになるとの御触れを出したところ、皆々が申すことには、命があつてこそ所領も望みとなるものだといひ、人穴に入ろうと申す者はいない。こうしたところに伊豆国の住人で仁田四郎忠綱と申す者がこの御触れのことを耳にして心の内に思うことには、「私は所領を千六百町持っている。今回の褒美四百町をいただいて、松房と益若の二人の息子に千町ずつ分け与えたいものだ」と思ひ、頼家のもとへ参上し、御前にかしこまり申し上げることには、「私忠綱こそが、ご命令を受けて富士の人穴へ入り、探索いたしたく存じます」と申し上げた。頼家はそれをお聞きになり、お喜びになることこの上ない。

### 〔語釈〕

「かまくら殿」＝源頼家。

「しよぞん」＝「所存」。心に思う所。考え。

「あき所」＝あいている場所。あき地。

「町」＝面積の単位。一町は一〇段で、約九九〇〇平方メートル。また約三〇〇〇坪。

「御判」＝中世、將軍や武將などが、自署花押して出した文書。

「仁田四郎忠綱」＝鎌倉初期の武將。伊豆国仁田郷（現静岡県田方郡函南町仁田）の住人。「忠常」とも。父母は未詳。

源頼朝、頼家に仕えた。この物語の主人公。

「松房益若」＝忠綱の息子であるが未詳。

### 〔絵06〕

源頼家と仁田忠綱の対面の場面。和田胤長の場合（一絵01）とは向きが逆になっている。対面の部屋には頼家と忠綱の他に、侍が五人、小姓が一人控えている。また、部屋の外にも侍が四人、子供が一人見える。庭の向こうには破風を備えた門が描かれている。

### 〔本文07〕

忠綱宿所にかへりて女ばうに語りけるは  
より家のちよくをかうふり、ふしのひと  
あなへ入申へく候。岩屋のうちにてし、

たるとも、所領二人の子とも千町つゝ  
とらするへし。まつすぎを植しも

子供を思ふならひなる。いかに諸国のさ  
ふらひたちの忠綱にくしとおもひや

らん。よしそれとてもちからなし。我らに

かきらすよくは人のならひなれば、ふ

覚にはあらず。人穴あな見みさらんほどは帰る

へからず。につたがその日のしやうぞくには

はだには白きかたひらのわきふかくと

かせ、きせいがうの大きくのひた、れ濃の

すそをむすんでかたにかけなし、うち

えほしにはちまきし、はかまのくゝ

りを高くよせ、まうふさ作りの太刀に

しろかねのさやまぎしたる刀、つま紅くれなゐ

の扇をさし添給そへふ。いづの国の住人

工藤左衛門尉すけもりをくそくして

たいまつ三十もたせ、七日と申さんに帰り

候はずは、岩屋のうちにてしゝたるとおほ

しめし候へ、とすてにはやへいりにけり。

### 【口語訳】

忠綱が屋敷に帰って妻に語ったことには、「頼家様から勅命をいただき、富士の人穴へ入り申し上げることになりました。もし岩屋の中で死んだとしても、私の所領を二人の子供

に千町ずつ与えることができます。松や杉を植えて長寿を願うのも子供達を思つての習慣ですから。諸国の侍達は何れほど（褒美をもらうこの）私を憎く思うことでしょうか。まあよい、そんなことを言つても仕方がありません。私たちに限らず、欲というものは人間の性なのですから、卑怯なことではないのです。人穴の内部を詳しく見てこないうちは帰つてくるつもりはありません。さて、仁田の出発の日の衣裳は、肌には白い帷子で脇を深く解かせたものを着て、生精好の大口袴をはき、直垂の裾を結んで肩に掛け、打鳥帽子を被り鉢巻きをして、袴の括りを高くして、まうふさ作りの太刀と銀で鞘を巻いた短刀を腰に下げ、端紅の扇を差し添えていらつしやる。伊豆国の住人の工藤左衛門尉すけもりを従えて、松屋の中で死んだと思ひなさいませ」と言い残し、あつといふ間に岩屋へ入つていった。

### 【語釈】

「きせいがう」|| 「生精好」。精密で美しい絹織物。

「大きくち」|| 大口袴のこと。裾の口が大きく、指貫や直垂の袴の下にはくもの。

「うちえほし」|| 「打鳥帽子」。かぶとの下にかぶる。緒は

付けず、上から鉢巻きをする。

「まうふさ作り」|| 「まうふさ」は「舞房」（「猛房」、「幢房」とも）で、平安時代中期から陸奥国で活躍した刀鍛冶、

もしくはその一派。『義経記』巻六では、佐藤忠信が「舞房に誂へ」た刀で自刃している。

「さやまき」Ⅱ「鞘巻」。鏢のない短刀。

「つま紅」Ⅱ「端紅」。縁を紅で染めたもの。

「工藤左衛門尉すけもり」Ⅱ未詳。

### 〔絵07〕

仁田忠綱の出発の場面。忠綱の姿は、基本的には本文の内容を忠実に描いている。家来である工藤左衛門尉すけもりも、本文の通り、松明を持って付き従っている。その先には駿河湾が広がり、船や松原が見える。また、海の向こうには、富士山が聳えている。

※前回の稿で、「絵02」に描かれた海を「駿河湾」とした  
が、和田胤長が直前に頼家に謁見していることから、「相模湾」と考えるべきかもしれない。また、忠綱も同様の手順を踏んだのだとすれば、この場面も「相模湾」ということになる。

### 〔本文08〕

五町はかり入て見れば、なにものもなし。  
太刀をぬきて四方をうちはらひてみれ  
とも、何ものもなし。また五ちやうばかり行  
てみれば、日本のことく月日のひかりあ  
らわれ、又二町ばかり行て見れば、少し松

はらにいてにけり。その地のいろ五色なり。  
爰に川有。だゝいま人のわたりたると  
おぼしくて、足の跡見えにけり。この河

をわたりてみれば、ひがしにだうあり。それ

を通りてみれば、たゝいま人のわたりたると

とおぼしくて候。二町ばかりうち過て見

れば、八むね作りのからの御所有。ひわた

ぶぎにぞしたりける。さて柱をはにしき

をもつてつゝみて有。御しよの内へたち入

見れば、心もことはもおよばず。軒の玉水

の落る露は、ひわを引にそにたりけり。

風のをともしやうひちりきにも似たり

けり。かゝることも聞ときは、しやうじ無常

の夢さめて、面白きこと限なし。蓮花の

ひらくをもつてひるとしり、しほむを

もつてよると知る。さてうしとらへすこし

みち有。見ればこかねの光堂有。にしき

をもつて天じやうをはり、同じくこん

じきににしきをもつてつゝませ、又

こがねの鈴をさげにけり。ずゝさえづるをど

は妙法蓮華経序品第一よりはしめて、一

部八くわん二十八品さうゐなく唱へける。鈴のひゝき

をきけば、祇園精舎のかねのこゑもかくや

らんとそ覚えける。猶うしとら行て見れは  
草もしげり、又北のはうを見れは池あり。

池の中に嶋あり。嶋のうへにゑんぶだごん

のこがねの光堂ひかりだうの八むねつくり有。心もこと

はも及はれず。さて島よりろく地へは八十九間

に一つつゝ鈴をさけられたり。いづれもこかね

のすゞ也。一ばんのすゞがめう法れん花きやうと

となふれば、それをはじめて八十九の鈴ども

一婦お八巻二十八品のもしのかずを一字もおと

さす唱へけり。その中にすゞ一つさえつるめう

ほう蓮華の経文なり。じうらせつによ、三十

ばんじん、此御経のくりきをもつて、一切しゆ生

をことくく九品のしやうどへむかへ給へととなへ

けり。池の水いろ五色なり。につたしまに  
ちかつき見れは、

### 〔口語訳〕

(忠綱が人穴に) 五町ほど入つてみると、何もなし。太刀

を抜いて四方を払いのけてみても、何もなし。それからま

た五町ほど進んでみると、地上のように月や日の光が現れ、

さらにまた二町ほど進んでみると、いくらかの松原に辿り着

いた。その地の色は五色である。そこに川がある。たった

今、人が渡つたようであり、足跡が付いていた。この川を渡

つてみると、東にお堂がある。そこを過ぎてゆくと、今しが

た人が通つたと思しい様子である。そこから二町ほど進んで

みると、八棟造の唐風の御所がある。その建物は檜皮葺の屋

根にしつらえてあつた。それから柱は錦で包んである。その

御所の中へ入つてみると、言い表せないほどの素晴らしさで

ある。軒からこぼれ落ちる露(の音)は、まるで琵琶を弾い

ているようであつた。また、吹き抜ける風の音は、笙や箏

に似ていた。そういつた音を聞くと、生死無常の夢も覚め

て、すばらしいことこの上ない。蓮華の花が開くことで昼に

なつたと知り、しばむことで夜が来たことを知るのである。

さて、丑寅の方角へわずかに道がある。見るとその先には金

色の光堂がある。錦で天井を張り、同じく(柱なども)金色

で、錦を使って包んであり、また、金色の鈴が下げてあつ

た。その鈴が鳴る音は、『妙法蓮華経』の序品第一から始ま

つて、一部八巻二十八品のすべてを一字の違いもなく唱えて

いるのだつた。鈴の音色を聞くと、祇園精舎の鐘の声もこの

ようであるのだらうと思われた。さらに丑寅の方角に進んで

みると、草が茂つていて、また北の方角には池が見えた。そ

の池の中には島がある。閻浮檀金の黄金で作つたような光堂

で、八棟造の建物がある。名状しがたいほどのすばらしさで

ある。さて、島から陸地へは八十九間の橋が架かつていて、

一間に一つずつ鈴が下げられている。すべて黄金の鈴であ

る。一つ目の鈴が「妙法蓮華経」と唱えらると、それに続いて

八十九の鈴が法華経一部八巻二十八品に記された文字の数を

一つも落とすことなく唱えるのであった。その中に一つの鈴が唱える『妙法蓮華經』の（以下のような）經文がある。それは「十羅刹女、三十番神よ。この御經の功德の力によつて一切衆生を悉く九品の淨土へお迎えなさいませ」と唱えていた。池の水の色は五色である。仁田が島に近づいてみると、

〔語釈〕

「五色」|| 青、黄、赤、白、黒の五種の色。奇瑞の出現や淨土の美しさを象徴することがある。ここでは忠綱が神聖な場所に辿り着いたことを意味している。

「八むね作り」|| 「八棟造」。神社や豪華な民家に見られる建築様式。複数の棟があり、それぞれ破風を据えた屋根を持つ。

「ひわたぶき」|| 「檜皮葺」。檜の皮で葺いた屋根。日本独自の屋根葺技法。

「心もことはもおよばず」|| 思案することも言葉で言い表すこともできない。名状しがたい。

「露」|| 本来は「音」とあるべき。

「ゑんぶだごん」|| 「閻浮檀金」。閻浮提の閻浮樹の下にある金塊。または、閻浮樹の林を流れる川の底に産する砂金のこと。

「ろく地」|| 「陸地」。

「八十九間に一つつゝ」|| 「八十九間の橋あり。一間に一つつゝ」とあるべき本文。絵の部分には、橋がしっかりと描か

れている。

「じうらせつによ」|| 「十羅刹女」。『法華經』の受持者を鬼子母神とともに守護する十の鬼神女。『法華經』「陀羅尼品」による。

「三十ばんじん」|| 「三十番神」。一ヵ月（三十日）の間、毎日交代で『法華經』を守護する神々。

〔絵08〕

仁田忠綱が八棟造りの御所へ入っていく場面。忠綱とすけもり以外は誰もいない。また、鈴が下げられた橋や光堂の様子が続けて描かれている。本文では、忠綱立ちが見て回った建物は複数あるが、絵ではそれらがあたかも一続きであるかのように描かれている。通路や建物の内部がタイル張りになっているのは、ここが異界でことを示す意図があるのだろう。

〔本文09〕

内よりからひたるこはねにて「何ものなればみづからがすみかへ来たれるぞ」と仰有てたち出給ふ。御姿を見れば、そのたけ十丈計なる。かうへに十六のつのをふりたて、口より吹いたすいきは、百丈ばかりあかりける。したはくれないのごとく也。につたこれを見て、おそろしきことかきりなし。大おんあげ

て申やう、「鎌倉殿よりの大しんには十三代、いつみの大納言にて十二代、仁田の四郎忠綱と申ものなり。かまくら殿より御使に

これまで参りて候」と申。大じやきこしめし、「それは頼家はなんぢをつかはし、みつからがさうがふをみすること、ひとへに頼家かうん

きはめと思ふ也。さりながら、なんぢかも

ちたる太刀をみつからにゑさせよ」と有

ければ、仁田承りて、四尺五寸のたちを大しや

にまいらせける。「刀も得させよ」とありければ、

こかねつくりの刀を、さやをは爰にとゝめ

て、みはかりぬきてたてまつる。大じや

太刀とかたなとを六こんに御おさめ、御悦

びはかきりなし。

〔口語訳〕

奥の方からしわがれた声で「何者だといって、私の住処へやつて来たのだ（お前はいったい誰で、どうして私の住処にやつて来たのだ）」との仰せがあつて、声の主がお出ましになる。そのお姿を見ると、身の丈十丈（約三十メートル）程である。頭の上に十六本の角を怒らせ、口から吐く息は百丈ほどに吹き上がっている。舌は紅花のように真っ赤である。仁田はこれを見て、恐ろしいことこの上ない。大声で名乗りを上げて申すことには、「鎌倉殿より十三代、和泉の大納言

からは十二代の末流、仁田の四郎忠綱と申す者でございませう。頼家様の使いとしてここまで参上いたしました」と申し上げる。大蛇はそれをお聞きになり、「それならば、頼家はわざわざお前を遣わし、私の姿を見せることになつてしまひ、まったくもつて頼家の運も尽きたものと思うぞ。そうではあるが、（こうなつたら）お前が持っている太刀を私によこすのだ」と仰せがあつたので、仁田は承知して、四尺五寸の太刀を大蛇に献上した。「短刀の方もよこすのだ」と仰せがあつたので、金銅で裝飾した刀を、鞘は手元にとどめて、刀身だけを抜いて差し上げる。大蛇は太刀と短刀とを六根に納めて、（それらを断ち切ることができたので）お喜びになることこの上ない。

〔語釈〕

「丈」 Ⅱ 長さの単位。十尺。約三メートル。

「鎌倉殿よりの大しんには十三代」 Ⅱ 未詳。「鎌倉」は「鎌足」の誤写か。事実、「鎌足／かまたり」とする諸本も多い。

ひらがなの場合は、「くら」と「たり」は見誤りやすい。

「いつみの大納言にて十二代」 Ⅱ 未詳。「いつみ／和泉」は

「いつ／伊豆」の誤写か。

「うんのきはめ」 Ⅱ 運が尽きて最後の時が来たこと。

「こかねつくりの刀」 Ⅱ 刀の金具を金銅づくりにしたもの。

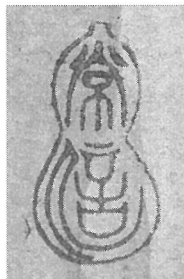
「六こん」 Ⅱ 「六根」。眼・耳・鼻・舌・身・意。迷いを起

こさせる原因となる六つの器官。

〔絵09〕

仁田忠綱が大蛇（浅間大菩薩）に遭遇する場面。忠綱は

太刀に手を掛け身構えており、すけもりは火のついた松明を掲げている。一方、池の中から現れた大蛇は、口から息を吐き出し、忠綱たちを威嚇している。その姿は、蛇ではなく龍として描かれている。髭や角を持ち、手足も認められる。絵の部分はこの大蛇を取り巻く黒雲で終わっており、少し間をおいて、「常信」の印が一つ見られる。



「常信」の印

二、仁田忠綱（忠常）について

本絵巻の内容は以上である。今回紹介したこの絵巻の後半部分は、主に忠綱の活躍の様子が描かれていたが、そもそもこの物語の主人公である仁田忠綱とはどのような人物であったのだろうか。まずは「忠綱」という名前について確認しておこう。歴史上の人物としては、実は「忠常」が正しい。『吾妻鏡』や『曾我物語』を始めとして、近世の文学作品の多くは「ただつね」（忠常／忠経）としている。一方、「富士の人穴」の諸本を見渡すと、「忠綱」となっているものが非常に多い。特に、室町末から近世初頭にかけての古い写本群、あるいはそれに続く近世の版本は、みな一様に「忠綱」として

いる。本絵巻も寛永四年版の版本を元（注）にしていることから、本文は「忠綱」となっているのであろう。但し、実在の人物としてはやはり「忠常」とすべきであるので、以下では「忠常」名称を用いて話を進めることにしたい。

仁田忠常は、仁安二年（一一六七）に伊豆国仁田郷で生まれ、源頼朝、頼家の二代にわたって鎌倉将軍に仕えた。しかし、頼家と北条時政との間に起こった政争に巻き込まれ、建仁三年（一一〇三）九月に誅殺された。三十七歳の生涯であった。そして、忠常の人穴探検は、その死の三か月前の出来事だったのである。試みに年譜を示してみよう。

仁安二年（一一六七）

誕生。父母未詳。伊豆国仁田郷の住人。

治承四年（一一八〇）

「石橋山の戦」に頼朝方として参戦。

建久元年（一一九〇）五月

「富士の巻狩」（頼朝）に参加。

建仁三年（一一〇三）六月

「駿河での狩」（頼家）で人穴を探索。

建仁三年（一一〇三）九月

「比企能員の乱」の後、北条時政に殺される。

右のうち、忠常を世に知らしめているのは、源頼朝が建久



元年（一一九〇）の五月に行った富士の巻狩での出来事であろう。これは『曾我物語』に詳しいが、エピソードとしては二つある。まず、一つ目は、巻狩の最中に突如乱入してきた大猪を、頼朝の目の前で仕留めたことである。誰も近づくとができなかった大猪に果敢に飛び乗り、刀でとどめを刺したその姿は、近世には錦絵として視覚化され、<sup>（注二）</sup>広く人々に愛された。また、神社の絵馬や山車の演題・水引・彫刻などとして、その姿は現代にまで伝わっている。あるいは、『尋常小学唱歌』（明治時代）の「仁田四郎」という曲は、この猪退治を全編で褒め称えているし、明治から昭和初期にかけての年賀状を見ると、亥年のモチーフとして大猪に乗る忠常が登場していたりもする。現代の我々にはあまりピンとこないが、戦前くらいまでは、忠常はよく知られた日本の英雄の一人だったのである。

二つ目のエピソードは、曾我兄弟に関するものである。巻狩に乗じて仇討ちを果たした兄弟のうち、兄の曾我祐成を討ち取ったのが、この忠常だったのである。こちらは『吾妻鏡』にも記録が残っているので、史実としても間違いないのであろう。猪退治と同じく、近世には『曾我物語』の名場面の一つとして人口に膾炙し、絵画化もされている。

### 三、忠常と胤長

では、このような輝かしい逸話を残した仁田忠常は、御伽

草子「富士の人穴」ではどのように語られているのだろうか。ここでは、最初に人穴を探検した和田胤長との比較を通じて、物語における忠常の人物像を考えてみたい。

『吾妻鏡』<sup>（注三）</sup>では、胤長は「伊東崎」の洞窟を探検したと記されている。しかし、物語では、忠常と同じ人穴を探検したことになっており、しかもそれが失敗譚として語られていることには重要な意味があるのだろう。端的に言えば、胤長は忠常の前座、引き立て役として利用されたのである。そのいくつかの例を紹介してみよう。

まず、人穴探検に対する両者の「覚悟の程」であるが、胤長は頼家直々の命令に対して「いかにしてひとあなへ入て又二たゝひともち返る道ならばこそ」（本文01）と言い、生きて帰れるのならば行くのですが、とたじろいでいる。一方、忠常は「岩屋のうちにてしゝたるとも、所領二人の子ともに千町つゝとらするへし」（本文07）と、一族、子孫のために死をも厭わないことを妻に語っている。

次に、「家系」についても二人は対照的に描かれている。胤長は物部守屋の子孫（本文04）であり、忠常は藤原鎌足の末裔（本文09）であるとされている。言うまでもなく、前者は仏法の敵と目された人物であり、対する後者は天智天皇とともに国家仏教を発展させた、仏教興隆の重要人物ということになる。本絵巻では、忠常については「鎌倉殿よりの大しんには十三代」（本文09）となっているが、もちろんこれ

では意味が通じないので、「鎌倉」は「鎌足」の誤伝であろう。この絵巻が参照した版本の類は、いずれも「鎌倉殿」となっているが、それを遡る<sup>(注四)</sup>近世初期の写本群はすべて「鎌足」と記されている。

さて、最後は、二人の「死の原因」についてである。胤長は、人穴から追い出された後に、「三十一」といはんはるのころ、しなのゝ国の住人、和泉の三郎と申ものにかたらひて、ゆへなきむほんをおこしてうたれんことは一定なり」（本文05）との予言が下されるが、これは、泉親衡の乱で捕らえられ、配流の後にその地で殺された、という史実を踏まえているのだろう。一方、忠常は、物語の最後で浅間大菩薩との約束を破り、人穴内のことを頼家に話したが故に殺されてしまう。物語の主人公としては、少々無残な死に方ではないだろうか。しかし、見方を変えれば、頼家から報告を求められ、死を恐れずにそれを語ったことは、武士として立派な最期を遂げた、ともいえるだろう。つまり、あくまでも主君への忠誠を誓う武士の理想像として、忠常は描かれているのである。

ところで、実際の忠常の死は、少々複雑な経緯を辿っている。建仁三年九月、比企能員の乱に際して、忠常は北条時政の命により和田義盛とともに能員を討ち取った。ところが病から奇跡的に快復した頼家の逆鱗に触れてしまい、今度は逆に時政を討つよう頼家から命じられる。その際、和田義盛は

すぐさま時政にそのことを密告したが、忠常は曖昧な態度をとったために、結局、時政に殺されてしまったのである。不本意な死であったろうことは想像に難くないが、だからこそ、物語では神仏をも恐れず主君に忠誠を誓う、立派な武士として描かれることとなったのではないだろうか。そこには忠常の死に意味を与え、また鎮魂することを願った仁田一族の意図が見え隠れする<sup>(注五)</sup>。また、その忠常に死をもたせさせた浅間大菩薩は、約を違えた者は容赦なく蹴殺すという姿を見せることで、富士の神としての神威を十分に知らしめているといえるだろう。そして、その背景には、この物語の流布に関わった、富士周辺の修験者たちの存在がほの見えてくるのである。

#### おわりに

仁田忠常は、史実でもまた物語でも、結局は「殺される」という運命を辿っている。ただ、物語の上では、主君の命を全うし、また、子孫に所領を残すことができたのであるから、それが「意味のある死」であったことは間違いないだろう。

忠常の遺族が抱く無念の思いと、富士の修験者たちの篤い信仰心が、「人穴」という場所で交錯したときに、この物語の誕生の契機はあったのである。

(一) 拙稿「絵巻『富士の人穴』（常信筆絵詞之巻物）についてその一」、『日本文学研究』（大東文化大学）第六十号、二〇二二年三月。

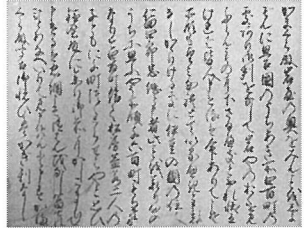
(二) 『名頭英雄揃』『仁田四郎忠常』（歌川国芳）、「源頼朝公富士之裾野牧狩之図」（歌川国久）、「右大将頼朝公富士裾野巻狩仁田忠常古猪討図」（歌川芳虎）など。

(三) 前掲、注一に同じ。

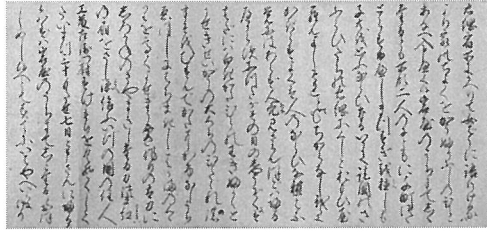
(四) 近世初期の写本群とそれに続く版本では、忠常の出自が明らかにされる箇所が異なっている。前者は、最初に忠常が登場する場面であり、後者は、人穴内部で大蛇（浅間大菩薩）に対して自ら名乗りを上げる場面である。恐らく、版本で出自の部分を移動させた際に、「鎌足」から「鎌倉」への誤記が起ったのであろう。

(五) 西野登志子氏は、「横死した仁田四郎の霊をしずめる『鎮魂』の意図」があったことを指摘されている。「富士の人穴草子」の形成、『大谷女子大國文』創刊号、一九七一年三月。

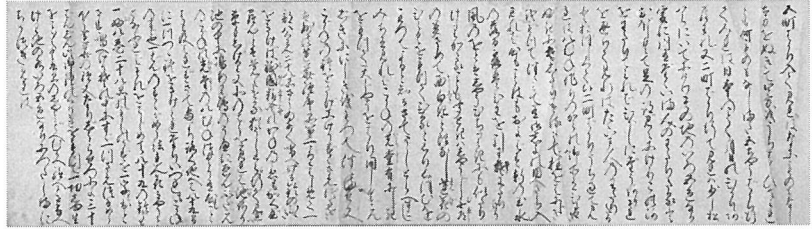
【画像】



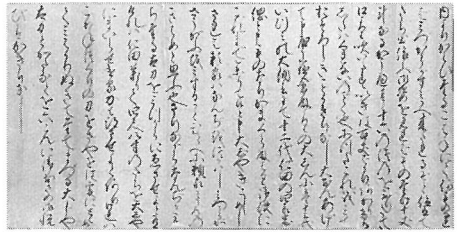
本文 06



本文 07



本文 08



本文 09



図 06 (横 98 cm)

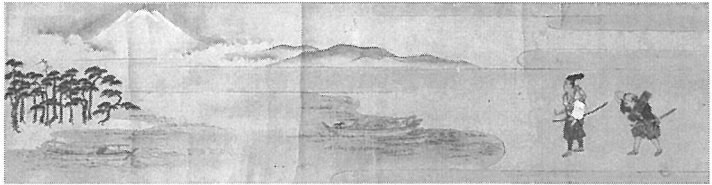


図 07 (横 95.5 cm)

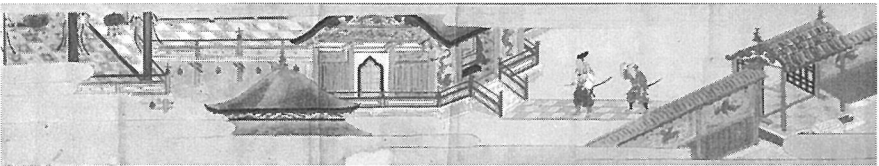


図 08 (横 135 cm)



図 09 (横 122 cm)



図 07 部分 (忠綱出発の姿)

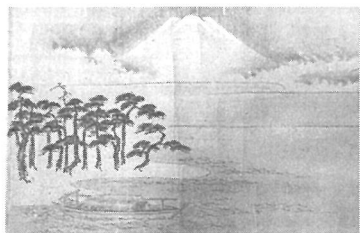


図 07 部分 (駿河湾と富士山)



図 09 部分 (大蛇に対する忠綱)



図 09 部分 (息を吐く大蛇)



図 06 部分 (頼家との対面)

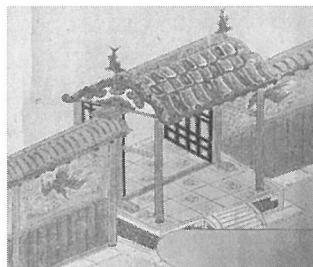


図 08 部分 (御所の門)

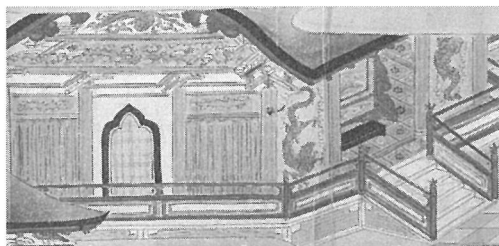


図 08 部分 (八棟造の御所)

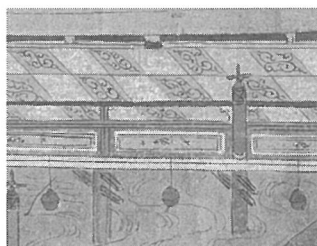


図 08 部分 (八十九間の橋と鈴)